

(3) 現地調査手法の検討

予測手法の検討結果をもとに、現地調査手法を検討した結果を表 1.13及び図 1.16に示す。

表 1.13(1) 現地調査手法の検討内容

調査項目	調査項目の設定根拠と調査内容
水質（SS）	○ 調査項目の設定根拠 予測におけるバックグラウンド濃度として使用する。 既存データがないため、現地調査により把握する。 ○ 調査地点 埋立予定地周辺海域（工事予定海域及びその周辺）に設定する。 ○ 調査時期 季節的な変化が想定されるため、4季とする。 ○ 調査方法 バンドン型採水器を用いて上層と下層の試料水を採水し、室内分析を行う。
水質（水温、塩分）	○ 調査項目の設定根拠 予測モデルにおける計算層厚の設定に使用する。 ○ 調査地点 小領域の埋立予定地周辺海域に設定する。 ○ 調査時期 埋立地の存在に係る予測対象時期は、夏季及び冬季であるが、工事の実施に係る予測対象時期は、それ以外の時期となることも考えられることから、季節変動を考慮して4季とした。 ○ 調査方法 水温・塩分計を用い、1mピッチで観測する。 (「1-1総論1」水質・底質」留意事項 参照)
底質（粒度組成、沈降試験）	○ 調査項目の設定根拠 粒度組成、沈降速度は、SS予測の前提条件として使用する。 埋立予定地では、既往の調査結果がないため、現地調査により把握する。 ○ 調査地点 工事により海底土の浚渫作業等を行う埋立予定地周辺海域（工事予定海域）に設定する。 ○ 調査時期 季節的な変化は考えにくいため、1季とする。 ○ 調査方法 スミマッキンタイヤ型採泥器を用いて表層泥を採取し、室内分析を行う。

表 1.13(2) 現地調査手法の検討内容

調査項目	調査項目の設定根拠と調査内容
溶出速度等	○ 調査項目の設定根拠 予測に用いる低次生態系モデルにおいて、対象海域の水質汚濁機構に関する条件に使用する。 ○ 調査地点 予測対象海域を代表する地点とし、埋立予定地周辺を密に設定する。 ○ 調査時期 対象海域の水質汚濁機構による水質への影響が最も大きくなる夏季及び影響の小さな夏季とする。 ○ 調査方法 室内実験により測定する。なお、溶出速度は水温の関数型とする。
流況	○ 調査項目の設定根拠 水質予測に先立ち行う流況予測において、境界条件の設定、現況再現性の検討に用いる。 ○ 調査地点 予測対象海域の流況を代表する地点とし、湾の形状や河川の流入位置を勘案し湾口、湾央、湾奥に設定する。(「1-1 総論1」水質・底質」留意事項 参照) 調査層は、埋立予定地周辺海域の水利構造は既往文献によると、明確な躍層が存在し、上層と下層で流れの状況が異なっているとされていることをふまえ、上下2層とする。 ○ 調査時期 埋立地等の存在に係る予測対象時期は、夏季及び冬季であるが、工事の実施に係る予測対象時期は、それ以外の時期となることも考えられることから、季節変動を考慮して4季とする。 ○ 調査方法 電磁流速計を用い、15昼夜連続観測を行い、主要十分潮の調和解析及び恒流成分を解析する。

注) 予測項目であるCOD、T-N、T-P、D0については、予測の現況再現性の検討等において現況データが必要であるが、県公共用水域水質測定計画に基づく測定結果により、埋立予定地周辺及び●●湾全域において上下2層の毎月調査が行われており、そのデータが使用可能であるため、現地調査は行わなかった。